

平成 25(2013)年度

NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2014年1月7日
氏名	岡田 朋子
所属団体	一般財団法人 北海道国際交流センター
受入機関名(所在国)	PKWI (Popular Knowledge of Women Initiative)
研修期間	2013年9月13日～12年12日

研修テーマ	NGOにおける女性の自立支援プロジェクトマネジメントの手法を習得する。
全体研修目標	ウガンダにおける女性の自立支援プロジェクトのマネージメントを学び、今後北海道国際交流センターで行う国際協力事業に役立てる。

具体的な研修内容

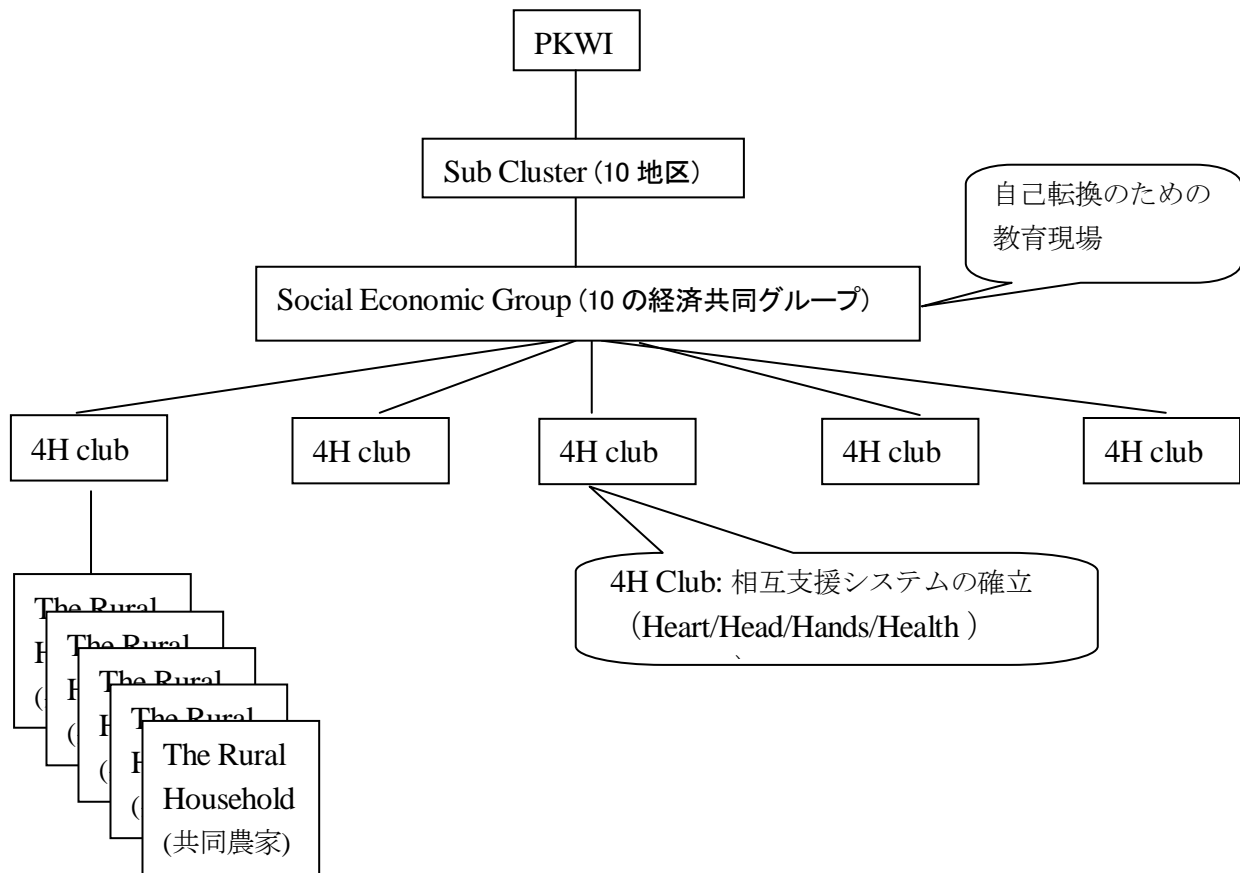
- ① PKWIの運営する教育センターにおいて女性の自立支援の活動を学ぶ
- ② ガーナで児童労働の支援活動をしている ACE の活動現場を視察
- ③ PKWIに登録している女性たちの村の視察
- ④ PKWIの教育センターにおいて女性の自立支援の活動を学ぶ
- ⑤ 首都カンパラにおいて若者の自立支援を行っている NGO の活動の視察
- ⑥ 研修してきたことを踏まえてアクションプランをたてる。

研修の成果

【PKWIの活動の視察】

今回の研修先である PKWI は 1993 年に Sam Ebkalin 氏を代表に農家の技術と生産向上のために設立された。最初は 5 世帯から始まり、徐々に広がり今では 2500 世帯の登録がある。活動内容は地元の特産物であるキャッサバから質の高い粉を作ったり、ひまわりの種から油を作ったりなどして、農家の収入向上につながるプロジェクトを展開している。近年では農家の女性たちが少しでも現金収入につながるような仕事を得るために learning center を作り洋裁教室を開いている。このようなプロジェクトの背景として、活動地域の住民のほとんどが農業に従事しており、広い土地を持っているにもかかわらず土地の脆弱さや市場への流通の困難さなどから収入がほとんどないという状況がある。また、HIV の蔓延や長年の紛争から孤児も多く、低年齢の女性たちの未婚出産も多いため、それが貧困を増長している。その貧困を絶つために PKWI は農業の技術支援などをはじめとして、女性達の収入につながる技術支援や流通、販売ルートの確立などに力を入れている。今回の研修では主に上記の取り組みを中心に視察をした。

PKWIの組織形態



① 農業の技術支援

PKWIの組織形態は上記のようになっており、現在は2500世帯の登録がある。それぞれ近隣の農家同士が協力しあい、共同農家を作り互いに支援しあうシステムになっている。支援の内容としては、人的支援から物質的支援など様々で、共同生産したものを市場に送るようになっていいる。それらのグループをまとめて教育する場となっているのが Social Economic Group(経済共同グループ)で4hクラブの代表が集まり、定期的に自分たちの状況などを報告し、農業の技術などの教育を受けている。また、PKWIでは定期的にリーダーを集めてミーティングを行い、活動報告とこれからの活動について話し合いをしている。課題としては、農業の技術を教える人材が不足しており、遠方から呼ばなくてはいけないことで交通費など資金面で苦労している。また、各グループが抱えている共通の問題として水不足や流通の問題、種不足など、自分たちの力だけでは限界がある問題もあり、他の支援機関(政府、NGOなど)への働きかけが求められている。

② 女性たちの収入につながる技術支援

PKWIの活動している地域の主な産業は農業で、それ以外の産業は近くの町で営む店などでの収入となる。しかしながらほとんどの女性は農業に従事しており、農作物での収入がないときは、まったく収入がない状態が続く。食べることに関しては、自給自足の生活をしているため何とか食べていくことができるが、子供の教育費(ウガンダは義務教育は授業料が無料だが、制服代、文具代などの費用がかかる)、医療費、交通費、携帯の通信料など、近代化にあわせて現金が必要になってきている。そのため多くの女性たちは子どもたちを学校に通わせたい、新しい作物を作るのに種を買いたいという理由からスモールビジネスを始めたいと願っている。そこでPKWIでは昨年からは洋裁教室を開き、女性たちにミシンを使った洋裁指導を行い、卒業後自分で店を出したり、町の洋裁の店に就職したり、現金収入になる道が作れるように支援をしている。現

在 20 名の女性があり、3つのクラスに分かれて授業を行っている。女性の年齢層は 10 代後半から 20 代前半で、すでに子どもを持っている女性も多く、子連れでの授業参加になるが皆真剣に取り組んでいる。課題としては家の都合でなかなか授業に来られない女性たちのモチベーションをいかに保つか。また、洋裁教室が終了した後の仕事の見つけ方など、持続的な支援が必要となってきている。

<女性たちへのインタビューからニーズを把握>

洋裁教室に参加している女性たちへのインタビューで、家族背景や生活状況、なぜ洋裁を習いたいのか等をきいた。多くの女性が一人で子供を育てなければならない環境にあり、まず子どもたちを育てるために収入が欲しいとのことだった。また、孤児も多く、教育を受けてない女性もおり、生きていくために望まない結婚をさせられている状況もあり、手に職をつけることでやりがいを見つけることができることや、彼女たちの両親は多くが紛争や HIV によって亡くなっていることで中には HIV に感染している女性もおり、こうした状況のもと、洋裁の技術を身に付け、仕事をするのが彼女たちにとって生きていく上で重要なことがわかった。また、今後は洋裁技術だけではなく、クラフト作りや特産物であるキャッサバを使った料理、家畜の育て方など、女性たちが家庭でもできる技術を教えてほしいとの意見もあった。

③ 流通・販売ルートの確立

PKWI の事業の中で、一番困難となっているのが流通である。PKWI に登録している農家の数は 2500 家庭に登り、遠いコミュニティでは 30 km にもなる。農家でとれたものを加工場のある場所や市場まで運ぶには自動車かボダボダというバイクタクシー、あるいは自転車で運ぶことになるが、自動車やバイクタクシーは値段が高く、自転車で運ぶには時間がかかりすぎることから、せっかく採れた作物も市場に運べないままになってしまっていることが多い。また市場も限られた市場にしか運ぶことができないため、商品が集中し、なかなか十分な現金収入につながらない状況である。現実問題として、どこかの資金的援助がない限り、自動車やバイクタクシーを使うのは難しいが、販売ルートを広げ、より売れる商品を作っていくことで収入をあげ、流通の資金を確保していく必要がある。そのためにも村の人たちに新しい技術を伝えていくことが重要である。

【カンパラにおいて若者の自立支援を行っている NGO 「Dis N Dat」 の活動の視察】

ウガンダでは都市と地方の格差が激しく、首都カンパラでは近代化が進みそれに伴い貧富の格差も激しくなっており、学歴、技術がない若者の雇用も難しくなっている。そのような状況の下、若者の雇用を促進する目的で 1998 年に設立された Dis N Dat は主に 20 代前半の若者に会社経営のノウハウを教え、学歴のない若者に雇用の場を与えている。事業内容はグリーティングカードやパッケージなどの注文を受け、オリジナルのデザインで販売している。スタッフは会計部門、デザイン部門、生産部門に分かれており、それぞれの部門にリーダーがいて週に 3 回はミーティングを行い現状報告とそれぞれの課題を自分たちで話し合い解決している。設立者である 2 人の女性は主に若い人では難しい販路の開拓を担当しネットワークを広げている。課題としては営業面で若者をどのように育てていくかが難しいようだ。実際にプロダクト部門と一緒に働いてみて感じたことは、スタッフそれぞれが自分の役割を把握しており、働くモチベーションが高いことだった。日本ではお金のために仕方なく働く若者もいる中、DisNDat では定期的に行うミーティングで各スタッフの悩みをきき、常に若者の働く意欲を持たせるような運営をしているところがとても参考になった。

【ガーナで児童労働の支援活動をしている日本の NGO 「ACE」 の活動を視察】

ガーナではカカオ農場での児童労働が社会問題になっており、日本の NGO である ACE (Action for Child Exploitation) が 1997 年から活動をしている。2009 年からガーナで行っているスマイル・ガーナ・プロジェクトを視察した。プロジェクトの背景として日本に輸入されるカカオの 80%を生産するガーナでは、100 万人にも上る子供がカカオ生産に従事している。そのような状況から日本でチ

チョコレート消費する私たちにとっても決して他人事ではないことから、「持続可能なカカオ農園経営と教育を通じた児童労働撤廃プロジェクト」(正式名)が始まった。ACEは地元のNGOであるCRADAと一緒に支援先の村を回り、児童労働をしている子供がいないか、また人身売買の被害にあっている子供がいないかを見回り、被害にあっている児童を保護してリハビリ活動や親への説得などを行っている。また住民集会等を通じて、子ども、親、住民に対する児童労働、教育、子どもの権利に関する意識啓発や子どもたちで問題を改善するミーティングの場を設けたりもしている。今回は2009年から支援している村が3年たち、今年でその村でのプロジェクトが終了するため、最後の村への訪問に同行した。ACEの活動を視察して感じたことは、パートナーとなる地元のNGOとの関係さらに支援先のコミュニティとの関係がとてよく、また日本の企業を巻き込んでのプロジェクトはとても有効的なものであるということだった。特に以下の点はぜひ、これからのプロジェクトの参考にしたい。

- パートナーとなる地元のNGOの活動をよく知り、信頼関係を築く。
- 国や地方自治体の政策を調べ、活動を共有し、効率的な支援を目指す。
- コミュニティのをよく調査し、住民の自発的な行動を促す
- ドナーに対するアカウンタビリティを大切にし、明確なプランをたてる。

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法

北海道国際交流センター(HIF)の設立は1979年にホームステイを中心とした国際交流団体として発足した。しかしながら近年は事業の多角化が求められており、国際交流だけではなく、開発教育、環境教育、青少年の育成など様々な事業を行ってきた。そのような中、国際協力の分野では北海道のNGO相談員として様々な講演会やイベントを開催したりと一般市民への啓発活動に力を入れてきた。2011年より実際にフィールドでの活動をはじめ、今回のウガンダでの研修は組織として本格的に国際協力のプロジェクトを行っていくよい機会であった。しかしながら実際にプロジェクトを行うにあたって、プロジェクトの計画の立て方やマネージメント、また評価方法など学ばなければならないことが多く、まずはプロジェクトの立案の仕方や重要なポイントである現状把握を行うためにPKWIの活動を視察し一緒に活動することでニーズを把握しよりよいプロジェクトの立案ができると考えている。

研修後のアクションプランとしては、研修の成果をもとにPDMを作成し、3月までにはプロジェクト計画において重要な「一定の成果」を「一定の期限内」に達成できるようなプロジェクトを立案し、NGO連携無償資金協力の申請をしたいと考えている。具体的なプロジェクトの内容としては、現段階では村のコミュニティのためのlearning centerの設立と授業のカリキュラム作成、運営までを考えており、授業の内容は、洋裁や散髪技術、また料理、ハンドクラフト、男性には家具作りや自動車整備などの技術を学ぶ場所の支援を考えている。

本プログラムや事務局側に対する提案、要望等

要望ではないが、今回の研修で大変だったのが受入れ機関に対する受入経費の支払いで、受入れ団体が現地のNGOであったため銀行口座もなく現金での手渡しとなった。現金は首都でしか引き落とすことができず、多額の現金を持っての移動となった。開発途上国では多額の現金を持ち歩くことは安全面において避けたほうが良いと思われるので、事前に送金方法や銀行口座の有無などを確認しておく必要があると感じた。

その他

【PKWIの活動するコミュニティーの様子】



カチェデ村の子どもたち



村の女性とその家族



キャッサバ工場で働く女性たち



洋裁教室に通う女性たち



洋裁教室の卒業生たち



マーケットの様子



キャッサバ畑で働く女性たち



村の集会に参加して



村の人たちへのインタビューの様子



村の学校と子ども

【ガーナで児童労働の支援活動をしている ACE の活動の様子】



CRADA の事務所にて



カカオ農家訪問



プロジェクトで建てた学校



ガーナの洋裁学校の様子



村と学校と NGO でのミーティング



子どもと親へのインタビュー